

# はまゆうと<sup>あしぶ</sup>苜生の里を訪ねて

研修旅行―蒲江町と安心院町

後 藤 知 久

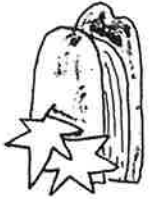
(会員・佐伯市中山区)



私としては、史談会入会以来はじめての研修旅行への参加である。

正直の処、学生時代日本史を最も苦手としていたので、これまであまり縁がなかった方面の旅であった。

(こんな旅もあったんだなあ)。これがいつわらない私の今度の旅の感想である。本当に楽しかった。まだ一度も参加したことのない人にも、是非お勧めしたい。



## 一 はまゆうの里を訪ねて

七月十九日(日曜日)雨

(今年の梅雨は思っていたより早く上がったね)と思っていたら、九州南部の梅雨明けを取り消す程、毎日毎日雨の日が続いている。降るでなし降らぬでなしの格別な梅雨の様相。むしろ、これからが梅雨の本番だぞと言わんばかりのうっとおしいお天気である。

私がまだ通信教育で夏のスクーリングに出席していたころは、七月二十日の開講式のあいさつには必ず、スクーリングが始まれば梅雨は上がると言ったものだが、今年の梅雨はどうやら趣きが違うようである。

「あなた。機関誌の編集をしている立場でしょう。会の行事には参加すべきじゃないの」

これまで日曜日の礼拝と重なる行事には出席しなかったが、妻にそう言われると、欠席するのは悪いような気がして、重い腰を上げる。

実はそういう理由もあったが、いま一つは、戦後間もないころ、ひととき警察官をしていた私にとって、畑野浦は初めての駐在勤務地であったのである。

しかし、畑野浦での勤務はわずか五か月で、その後本署の内勤に変わり、続いて大病を患い、結局、退職という事になったが、やはり初めての駐在勤務をした所だけに懐かしさがあった。それだけではない。

あれは、今から三年程前のことである。県が花いっぱい運動をすすめていたころ、その実績のある市町村を回って取材し、それを編集して、小冊子を発行することになった。そこで、予算に恵まれない県は、県下から何人かの人を選び、その取材の仕事を委嘱することになり、私もその一人に選ばれ、畑野浦江武戸のはまゆうを取材することになった。

六月の梅雨のさ中、それこそ四十年ぶりに畑野浦を訪問した。そして、こんなめぐり合わせになったことに、何か目に見えぬ糸にあやつられているような気持になった。現地では、リーダーの富沢さんや畑野浦史談会のみなさん方に色々とお世話になった。残念だったのは、記事には必ず写真を添付するようになっていたが、開花を前にした季節で、それを果たすことができなかった。

そんなこともあって、今度の話があった時、やはり、はまゆうの花を見なくては責任を果たせないような気が

して、参加することに決めた。

## ① 出 発

朝、予定のバスに乗るため自転車で家を出る。雨天でも決行すると聞いていたので、雨具の用意もする。

所定の時間に出発する。駐在所勤務をしていた時のことを思うと、道路も舗装され、しかもトンネルが出来てかっでは命がけで乗ったバスも快適。そういうえば、暮れの真夜中、山道を一人で山越えしたこともあった。

トンネルを抜けると、それこそ雪国ならぬ畑野浦の部落が眼下に広がる。道路沿いの夾竹桃も花いっぱい運動の成果の一つと聞いている。

畑野浦のバス停に着いたころ、また雨になる。ひとまず公民館へ道を急ぐ。

「この公民館も完成当時は名を売った程のものでしたよ」

と、やや古びた建物を惜しむよ



(ブリの外洋養殖場)

うに説明してくれる。

地元の主だった人の紹介、こちらの代表者の紹介など  
があつて、今日の日程の説明がある。

それによると、これから蒲江町教育委員会が回してく  
れたバスに乗り、町の中央にある東光寺・王子神社を拜  
観した後、県境の波当津海水浴場まで足を伸ばし、帰りは  
同じコースを取り、元猿海水浴場を経て、最後に江武戸  
のはまゆう公園を見学し、元の公民館で懇談会という、  
距離にして約八十キロの行程である。この説明で何より  
感激したのは、日曜日にもかかわらず、町の教育委員会

の示してくれたご好意  
であつた。

## ② 海

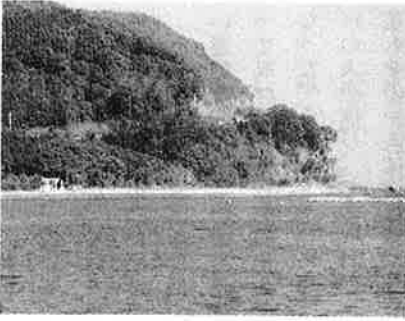
私にとっては懐かし  
い海岸線である。赴任  
した時は十一月の初め  
で、浜はさつまいもの  
きり干しと唐人干で足  
のふみ場もないくらい

だつた。

楠本の部落の青年達から「農業倉庫に毎晩あやしい音  
がする」と届け出があつて、真夜中に自転車をとばせた  
のもこの海岸だつた。

だが、そのころと違うのは海である。あのころの海は  
自然のままだつた。広くて青い海だつた。人々の生活を  
温かい腕で抱いていてくれるような海だつた。いま、こ  
うしてバスの中から見る海は、まるで人間の支配下にあ  
るような感じがした。真珠の養殖の筏、はまちの養殖場  
と、湾内は異物でいっぱい覆われている。そればかり  
ではない。岸辺には大小様々の船が折重なるようにもや  
い、わずかの空間には、白い泡のようなものが吹きつけ  
ている。そんな様々なものがかもし出す音のない音が私  
の耳に響いてくる。

山が海岸に突き出すように迫り、わずかな平地に寄り  
合うように立ち並ぶ民家。人間の生きることへの執着と  
厳しさが、ひしひしと胸に迫ってくる。こうして、のん  
びりとバスの中から眺めているのが悪いような気がした。  
食糧難の苦しい時代ではあつたが、私はあのころの海が  
無性に思い出されてならなかつた。



(江武戸公園)



③ 東光寺・王子神社

小雨にけむる東光寺に着く。雨のお寺の境内というのは意外と風情がある。待っていてくれた案内の方の説明を聞きながら拝観する。

東光寺は、臨済宗妙心寺派のお寺で、本尊は釈迦如来正保四年（一六四七）の創建というから、今から三百四十年前のものである。別棟に西野浦の海中から引き揚げられたという葉師如来もおまつりしてあった。また、境内には漁の町らしく魚鱗供養塔も見られた。

お寺の拝観を終えて、後ろの小高い斜面にある墓地へ行く。ここには御手洗家の墓地がある。偶然というのかこの日、御手洗信夫さんの赴報を聞く。妻が親しくしていただいていたので、帰ったらすぐ報せなければと思う。それにしてもいつも思うのだが、浦辺の人はお墓を大事にしているのに感心する。

そこから山伝いに行った所に王子神社がある。うっそうとした森の中に、現存（一七一三）建立の社殿がある。祭神は熊野三社の分霊をまつる。社殿を取り囲む木立に気を取られていたら、これは常緑広葉樹林（スタジイ群団）のうち佐賀関以南に多いスタジイIIタイプミンタチバ



（町の中心部）

④ 波当津海水浴場

ナ群生の典型的な植生を保存する原生林であると説明があった。山上から見る町並みは、一軒一軒別でありながら、それが一つに寄りそって生きているような感じがした。

再び車上の人となる。森崎・丸市尾を経て県境の波当津海水浴場まで、曲りくねった道を走る。登り坂になり眼下に青い海が広がる。ここへ来て、はじめて海らしい様相を見せる。屋形島や深島が前方にぼんやり浮かぶ。

海水浴場に着くころは雨も上がる。砂浜で昼食をとる。さすが蒲江一の海水浴場だけあって、その雄大な眺めに食はずむ。松林の中では車で来たらしい若者達が、パーベキューを楽しんでいた。息苦しいような海岸を走って来たあとだけに、この広さがいつそう心を豊かにする。群生するはまゆうも優しくほおえみ、（蒲江に来たなあ）

という気持に満たされる。

しかし、これが人の集まる場所の宿命なのか、いま一つ清潔感がほしいと思った。

帰途、ちょっとした車のハプニングがあり、かけ足で高山・元猿海水浴場をのぞき、最終目的地の江武戸公園へ急ぐ。

### ⑤ 江武戸公園

畑野浦から尾浦へ向けて約二キロ。目指す江武戸公園は岬の突端にある。ホルトの林を抜けると、手入れの行届いたはまゆうの群生が白い炎のような花盛りである。花のない季節に訪れた私にとって、やっと目的を果たしたような安堵感が身内を走るのを覚える。

あの時、富沢さんはこう言った。



(公園のはまゆう)

「戦争から帰った時、荒れた山野を見て、なんとかして他郷にある人が、(ああ、ここはおれのふる里だ)といえるような場所を作り

たい」

と。それが、この江武戸のはまゆう公園である。

み熊野の浦の浜木綿百重なす心は思へど直に逢はぬ  
かも  
柿 本 人 磨

### ⑥ お別れパーティ

途中のハプニングでやや時間は下がったが、一日の行程を無事終了した。再びはじめの公民館へ帰ると、会場には手作りのトコロテンとまんじゅうが待っていた。婦人部の方の奉仕である。さすがに浦辺の人の手作りだけにおいしい。

それにしても今日一日、蒲江町のみなさんの至れり尽せりのおもてなしには感激した。とても真似のできるようなものではない。激しくなった雨の中、佐伯まで送ってくれたバスの中で、その温いおもてなしを、私はもう一度思い返した。

### 二 雨にけむる芦生の里

参加申し込みが遅れて「もう、満席です」という返事に、ちょっとがっかりしていた処、欠員が出て参加する

ことになった。

今度の研修旅行もまた雨になった。若い人達ならっかりするところだが、目的がはっきりしているだけに気落ちはない。予定どおり、一人の不参加者もなく出発。

安心院は私にとって初めての土地である。予備知識も何もない。あるのは宇佐の近くということから広い平野を頭の中で描いていた。いただいた資料によると、

芦生の里、つまり芦の生える里のアシブに安心の字を当て、古代の倉院が置かれたことから安心院になった。

と、地名起源の説話が述べてあった。

予定では、サファリを經由して安心院に入ることになっていたが、雨模様のため変更して山香町から入る。

思いがけなく続く山道に、私の安

心院への最初のイメージは崩れてしまふ。平野どころか、オーバーに表現すれば、山の中の秘境である。おかげで、珍しい石風呂いわを見ることができた。境内の林の中の小さな墓になぜか心の安らぎを覚え、幸先のい



磨崖仏の本塔



右京

い旅になりそうな予感がした。

同じ県内でもここは県北。一足先に秋が来たのか、路傍の草の中、田んぼのあぜに咲く赤い彼岸花の群れが、雨と合わせて旅情を添えてくれる。

これまで、旅をするといえばお天気を願ったが、今度のような旅には多少の不便さはあったものの、雨による違った趣きを味わえたのは、思わぬ大発見だった。もの言わぬ仏、赤い彼岸花、音もなく降りそそぐ雨。そこにかもし出される静けさに、私は忘れていた何かを思い出したような気がした。残念だったのは、雨で水量が増していたため、東椎屋の滝を身近に見ることができなかったことである。

午後五時、第一日目の行程を終える。因みに今日一日の行程は、

石風呂―佐田神社―佐田の京石―磨崖仏―深見五重塔―東椎屋の滝―松本の木像仁王像であった。

朝、夜来の激しい雨も上がっている。しかし、どんよりと曇った空は、いまにも泣き出しそうな顔をしている。昨夜の楽しかった夕食を思い出す。料理はどれもおいしく、私にしては珍しく食べ、そして飲んだ。飲んだといっても酒ならぬ地元のブドウワインである。

ロビーの窓から眼下の安心院の町を見下ろす。どこかで見たような町だと思っているうちに津和野の町を思い出す。そういえば、ここも盆地である。



滝の木屋

最近の観光客には、あまり作られた施設は喜ばれない。自然とう

まいもの、そして適当に体を動かせるような場所のある所が喜ばれる。それにひなびた温泉でもあれば最高である。史蹟や文化財の果たす役割も大きい。それも、自然のあるがままの姿に近いものが受ける。が、何よりも大切なのは、「静けさ」である。あわただしい生活の中からしばしの逃避が求められる。いや、逃避でなくて、人間の復活かもしれない。安心院はそんな私達の願いを果た

してくれる場所の一つかもしれない。

午前九時、宿舎の大交ホテルを出る。今日の目的地は院内町の龍岩寺で、今度の研修旅行のメインといってもいい。このお寺には国宝の仏像三体がある。

寺は深い深い山奥にある。

私の旅の喜びは、こうした貴重な文化財に接することができることもあるが、いま一つは、生きている人間の生活を見ることができるともある。

蒲江に行った時感じたがこんな山の奥にも人の営みがある。それから受ける感動にいつも心を洗われる。ここにも歴史を織る人がいる。それが私の胸を打つ。

どこまでも続く石段を登って行くと、山頂近くの奥の院に、薬師・阿弥陀・不動明王の三体の仏像が並ぶ。湾曲豊かな眉、長い瞳、柔らかに沈黙を守る唇、肩から胸へかけてのおだやかな肉取り、細い技巧のみられない実



院の奥の龍岩寺



に雄大な姿……案内書の説明にあるとおりの仏像にしばし時のたつのを忘れた。「やぶの中へ入らないで下さい。マムシがいますから」という、登り口にあった注意書も忘れて下山した。

曇った空から薄日が射し始めた。旅の終わりのぶどう狩りを祝福するように束の間のお天気である。予約してあったぶどう畑に入り、童心に返って楽しんだ。これもまた安心院の魅力の一つである。

帰りは山越えして湯布院へ出る。はじめてのコース。こんな所にこんな道があったのかと驚く。湯布院へ入ると、山の中で演習でもしているのか、立ち並ぶ自衛隊のテントを見て、ふと、秋の日米合同の大演習のことが思い出され、古代から現実へと引き戻される。

二日間の雨の旅を終えて、私はいま、ゆっくりと、旅の思いにひたっている。

てり続く孟蘭盆会の夕べなり 涼しかれとて墓に水

金子 帰山

あなたも一緒に旅を試みませんか。楽しい旅を。

尚、文中の写真、地図等につきましては

「84 町勢要覧かまえ」を使用させていただきました。

## 短歌

②

研修旅行「蒲江町」に参加して  
はまゆうの見学

蒲江湾を見下ろす丘に墓地ありてキャノン・毅と三基並びぬ

東光寺の山門わきの木の蔭に魚鱗供養塔苔むして立つ  
七軒株風化のきざし現われぬ王子神社の森の中にて

悪相の十二の神のおわします薬師如来の家来なりとぞ

無口だと紹介ありし前田さん観光ガイドで雄弁ふるう

はまゆうの傍に寄り添い砂浜にわれしおらしくポーズをつくる

くわせたいたべさせたい会つくりたいそんな浦々はまゆう育つ

はまゆうを佐賀関まで植え継がんいそしみ励む村の情熱

あまかける日本一のはまゆうに夢を託してわれらは帰る

茂り合いて咲けるはまゆう雨の中海原向い何を語る